

### 13. 腎血管性高血圧症に対するカプトプリル負荷レノグラフィの診断基準に関する再評価

伊藤 和夫 塚本 江利子 中駄 邦博  
永尾 一彦 鐘ヶ江香久子 加藤千恵次  
古館 正從 (北大・核)

カプトプリル負荷腎シンチグラフィ (CPRS) は腎血管性高血圧症の特異的診断法としてその臨床的意義は確立されている。しかし、診断基準に関してはいまだ十分な検討がなされていない。retrospective な検討により新たな診断基準をうることができたので報告する。

1985 年から 1991 年 12 月までに本検査を施行した症例は 41 例 (男/女=24/17, 年齢分布 9-81 歳) で、その最終診断は腎血管性高血圧症 (RVH) 16 例、その他 25 例であった。今回の検討ではカプトプリル負荷後の腎摂取率低下を 25% 以上に設定することで specificity は 76% から 96% に有意に向上することが分かった。CPRS は specificity の高い検査法であるが、その際、慢性腎実質性障害を除外できる診断基準の設定が重要であることが示された。

### 14. 尿路感染症ならびに膀胱尿管逆流症における<sup>99m</sup>Tc-DMSA シンチグラフィ：腎瘢痕の局在部位の分析

伊藤 和夫 塚本江利子 中駄 邦博  
永尾 一彦 加藤千恵次 藤森 研司  
古館 正從 (北大・核)

上部尿路感染症は細菌尿の腎実質への逆流に伴う腎盂腎炎が問題になる。大部分の腎盂腎炎は区域的腎実質障害 (瘢痕) を残し治癒する。したがって、腎瘢痕の診断は治療観点からは感染尿の腎実質への逆流の存在を意味し、予後的観点からは腎機能障害の原因を意味する。これまで施行した 229 症例の初回検査時の<sup>99m</sup>Tc-DMSA 腎シンチグラフィに関して Monsour ら (Brit J Urol, 60: 320, 1989) の報告を参照し、腎瘢痕の局在部位の診断に関して Planar および SPECT 両者による検出率を比較検討した。Planar および SPECT とともに欠損像は腎上下極に 90% が観察され、SPECT は Planar より 20% 程度検出率が高かった。腎瘢痕の局在性の特長は本病変の診断に際して有用であろう。

### 15. 髄芽腫による骨転移の 2 例

山崎 哲郎 丸岡 伸 松下 晴雄  
坂本 澄彦 (東北大・放)  
中村 護 (国立仙台病院・二放)

当院で経験した髄芽腫の骨転移 2 例のシンチグラムおよび骨 X 線所見について、文献考察を加えて検討した。骨シンチグラムはいずれも体幹部を中心に多発性高集積像を呈した。骨 X 線写真では 1 例は溶骨性変化と造骨性変化の混在した像、他はびまん性造骨像を呈した。これらの特徴は従来の報告と一致していた。Ga シンチグラムは後者のみ施行され、骨シンチグラムと同様の部位に強い集積が認められた。髄芽腫の骨転移はまれなものではなく、術後例、脳室シャント例に多く、特に痛みを伴うことが多い。髄芽腫術後例では転移の疑われる場合、積極的に骨シンチグラフィを施行する意義があると考えられる。

### 16. 卵巣癌の<sup>67</sup>Ga シンチグラフィ

鈴木 俊彦 角原 紀義 及川 浩  
(盛岡日赤病院・放)  
松田 勲 菅原 英治 藤原 純  
(同・婦)

卵巣癌治療前例 28 例、治療後例 41 例 (うち再発、転移例 8 例) に<sup>67</sup>Ga シンチグラフィを施行した。

治療前症例の<sup>67</sup>Ga シンチグラムと CT を対比し検討した。<sup>67</sup>Ga 集積陽性率は 28 例中 15 例 (53.6%) で、うち 12 例は CT 上、充実性を呈していた。陰性例は 9 例で、うち 6 例が CT 上、嚢胞性を呈していた。集積の判然としないものは 4 例で CT 上、全例が嚢胞性を呈していた。組織型別では類内膜癌の 8 例中 6 例が<sup>67</sup>Ga 集積陽性で、うち 5 例が CT 上、充実性を呈していた。再発、転移例 8 例中 6 例 (75%) が<sup>67</sup>Ga 集積陽性で治療前症例より高率であった。